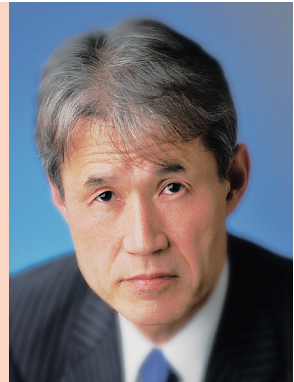


ご挨拶

## 委員長在任期間を 振り返って

ASBJ 前委員長  
慶應義塾大学教授

にしかわ いくお  
西川 郁生



### はしがき

2014年3月末の委員長退任から約1か月を過ぎ、その間、公益財団法人財務会計基準機構(FASF)主催による市場関係者との退任懇談会の場で、各セクター、各組織を代表する方々から送別の言葉をいただいた。それらは私の身に余るものであったが、そのような行事も終わり、今は人心地ついているところである。ここで簡単に7年間の委員長在任期間を振り返ってみたい。

### 斎藤初代委員長

私は2001年8月の第1回の企業会計基準委員会(ASBJ)から斎藤静樹初代委員長を間近に見てきた。斎藤委員長が日中韓3か国会議の挨拶で中国の故事を引用して主催の中国を驚かすという場面もあったし、与党からの時価会計凍結減損会計適用延期の要請という難問に当たり、有識者の意見を聴取して丁寧に問題を解決するところも見てきた。何よりも有益だったのは、斎藤委員長から、会計基準設定主体は市場関係者の意見集約の場であることを叩き込まれたことである。委員長就任後、意見聴取の方法

を変えたり強化することで、ASBJは狭い路を進んできたと思っている。

### 東京合意から同等性評価へ

2007年4月の委員長就任時に考えたことは、我が国市場関係者にASBJの基準開発活動の進み方を見えやすくすることだった。2007年8月の東京合意は、理念的には極めて長期にわたるコンバージェンスについて、その道筋を示そうとしたものである。東京合意は市場関係者から温かく受け止められた。その中の一区分である短期プロジェクトは、当時進められていたEUの同等性評価への対応を軌道に乗せるものとなったからである。ASBJの工程表は2006年から公表されていたが、それが東京合意の下で組み替えられ、両者を一体として見たとき、同等性評価へのASBJの対応がわかりやすいものとなった。棚卸資産のLIFOの廃止に関しては、影響のある米国企業から強い反対意見をもらうということもあったが、相当量の基準開発や改正が短い期間に順調に進んだ。そのことは、勿論、作成者、監査人に負担をかけたという一面はあった。

同等性評価の結論は2008年の年末にECから発表され、日本の会計基準はIFRSと同等と

評価された。

## 中間報告とコンバージェンス

直後の2008年末に私は病で入院し、年明けに大がかりな手術を受けた。いくつもの講演、座談会を当時の副委員長や常勤委員に代わってもらうなどの迷惑をかけた。

復帰後の2009年6月、金融庁企業会計審議会から「我が国における国際会計基準の取扱いに関する意見書（中間報告）」が公表されて、IFRSの我が国企業への適用問題が一気に大きな課題となった。ASBJが進めてきたコンバージェンスについては、中間報告でその継続・加速化が明示され、連結先行という考え方も提示された。

設立当初の寄附行為では委員の任期は連続3期（1期3年）となっていた。私の委員任期は2010年3月までであった。しかし、FASFは公益財団法人化を目指す中、2008年12月の理事会で定款を変更し、公益化関連以外の項目として、常勤委員任期につき2年2期（最大4年）の延長を可能とした。この規定により、私は2010年4月に委員長に再任された。なお、このときから委員長は委員会の互選から理事会選任に変更されている。

ASBJでは、2010年6月の中期運営方針に記載されるように、IFRS適用を睨んだ活動の方向性を模索した。IFRS任意適用会社のためのIFRS実務対応グループの活動を行う一方、コンバージェンス（東京合意にあるその他のプロジェクトとMoUに関連するプロジェクト）に精力を注いだ。しかし、短期プロジェクト終了後のコンバージェンス作業は、連結先行の考え方を活かせず、うまく進まなかった。企業結合（フェーズ2）や開発費を含む4つの基準については、FASF内に設けられた単体財務諸表に

関する検討会議からアドバイスをいただくこととなった。

## 二度の任期延長

2011年の自見大臣談話はIFRS適用に慎重な方向性を示すものであった。コンバージェンスを進める環境はさらに遠のいた観はあったが、単体検討会議の議論を踏まえ、4基準についてはそれぞれの結論を得ることができた。

個人的には健康問題もあり、2010年秋に慶應義塾大学からの誘いがあったとき、2期目の延長期間はない方向で萩原理事長（当時）には伝えてあった。しばしの時を経て理事長からは、現下の混沌とした状況での委員長探しは難しく、2012年4月から非常勤であっても構わないので委員長をとりあえず1年継続するように求められた。必要な定款変更もなされ、二度目の任期延長となった。結果的に1年後にも新委員長は見つからず、定款いっぱい任期を使うこととなった次第である。

## 当面の方針と3つの柱

2013年6月に企業会計審議会から公表された「国際会計基準（IFRS）への対応のあり方に関する当面の方針」（当面の方針）は、当面、IFRSの任意適用の拡大を目指す方針が明らかにされたものであり、ここでASBJにIFRSのエンドースメントという新たな役割が与えられた。これにより、ASBJは、IFRSへの意見発信、エンドースメント、日本基準の整備という3つの柱を立てていくことになる。

エンドースメントは、私の任期中に公開草案を出すことはできなかったが、多少のずれはあっても国内での議論は順調に進んでいる。日

本基準の整備は今は現行基準の下での実務上の問題の解決に限定されているから、主体的なコンバージェンスのあるべき進め方に関しては小野行雄委員長に願うほかない。

## AOSSG のリーダー

ここで時点は少し遡るがアジア・オセアニア会計基準設定主体グループ（AOSSG）について触れておきたい。2008年頃日中韓3か国会議の場で、アジア・オセアニア全域にわたる会計基準設定主体構想を提案したのは日本からである。2009年、北京での準備会合を経て、秋に初代議長国となったマレーシアで第1回会議が開かれ、国際会計基準審議会（IASB）の各プロジェクトに対応するワーキング・グループが4つ設置された。その会議で副議長（次期議長）国の投票があり、ASBJが第2代議長を担うこととなった。2010年からの1年間で、議長諮問委員会（CAC）の設置と活用、ビジョン・ペーパーの公表、IASBのコメント募集のすべてに対するAOSSGからの意見発信を行った。

アジア・オセアニアの意見が多様であることは、当初から参加国自身が認識していたことである。だからこそ、我が国の意見に同調する国を常に作って地域の多数意見となるように努力する必要があると考えている。

## 定期協議から ASAF へ

2013年からの任期最後の1年は忘れられない1年となった。各国各地域の会計基準設定主体等からなる会計基準アドバイザー・フォーラム（ASAF）がIFRS財団に設置され、2013年4月に第1回の会合が開催されたためであ

る。地域での市場関係者の意見集約を最もよく行っている各国及び各地域の会計基準設定主体からのインプットをIASBがIFRSの開発に活かすという考えである。それとともにIASBと各国及び各地域との連携を強化する動きと考えられている。ASAFの開始により、ASBJとIASBの定期協議は、2013年6月を以て終了することとなった。定期協議は斎藤委員長時代の2005年からコンバージェンスの共同プロジェクトの場として続いてきており、ASBJにとっては大きな意味があった。しかし、ASAFの意義に鑑み、また、これまで以上にASBJとIASBは各階層で緊密にコミュニケーションを図るという前提の下で、定期協議は終了することとした。

ASAFの議論で、当面、概念フレームワークが大きな焦点となっているが、2013年12月のASAFでは、純利益・OCIの議論のためのアジェンダ・ペーパーをASBJで作成する等、積極的な意見発信の場とした。

## おわりに

延長任期を含め7年の任期をやり尽くし、私は温かく送り出された。3月のASAF及び会計基準設定主体国際フォーラム（IFASS）の場で盛大な拍手をいただき、任期最終日の米国財務会計基準審議会（FASB）との定期協議に伴うディナーでは、サプライズゲストの直前2議長を含む、歴代3議長から送別の言葉をいただくという栄に浴した。

ASBJが存続する以上やり残したことは多いが、思い残すことはない。また、難しいことは山積しているが、会計基準設定の将来を担う若い人材が台頭してきたことに大きな期待を抱いている。

小野委員長の下でASBJの新たな船はすで

に出航している。エンドースメント、その先にある日本基準のコンバージェンスの進め方等、ASBJの向かっていく針路は、引き続き容易なものではない。ASBJの活動の成否は、我が国市場関係者の支持が幅広く得られるかにかかっている。ASBJと市場関係者の緊密な対話と、それに基づく我が国市場関係者のASBJへの支持に期待しているところである。

末筆ながら、長年にわたる皆様からのご支援に深く感謝するものであります。大変ありがとうございました。